

千葉集会へようこそ

榎澤和夫(千葉県歴教協事務局長)

第45回千葉県歴史教育研究会(以下千葉集会)へようこそおめでとうございます。例年この時期に開催される千葉県歴教協の集会は、各支部持ち回りで開催しています。昨年は松戸支部が担当しました。しかし今回の千葉集会は、全国大会千葉大会事務局が担当しています。ご存知のように、今年の8月3日(金)～5日(日)に、習志野文化ホールと千葉大学教育学部を会場に第64回歴史教育者協議会全国大会千葉大会が開催されます。今回の千葉集会は、来るべき夏の全国大会千葉大会のプレ集会として位置づけて取り組み、千葉大会の運営を担当する全国大会事務局がそのまま千葉集会の運営を担当することになりました。

さて、千葉県歴教協は1994年の前回の千葉大会以降、「地域に根ざす、子どもに根ざす」を掲げ活動してきました。そこで千葉集会では、記念講演として愛知県立大学の久保田貢さんをお招きして、千葉県歴教協の今までの活動の成果と今後の課題について提起していただく予定です。久保田さんにはここ数年間に発行した千葉県歴教協の会誌『子どもが主役になる社会科の授業』をお渡ししています。会誌に掲載された地域の掘りおこしや授業実践の分析を通して、千葉県歴教協の「地域に根ざす、子どもに根ざす」活動を総括する講演になると思われます。

地域実践報告では千葉支部の浅尾弘子さんに前任校の泉高校での授業実践報告をお願いしました。いわゆる「教育困難校」での授業実践ですが、映画「蟹工船」のラストシーンに納得しなかった生徒たちが、歴史の真実を求めて、小林多喜二の時代や映画が作られた1950年代の日本のようすなどを調べ、班討論を経て、映画制作者や漫画家に手紙を書くという実践です。生徒たちが学びの主体性を獲得していくようすが生き生きと語られるでしょう。「教育困難」の意

千葉県歴教協の集大成が

1枚のDVD(2011年改訂版)になりました

このDVD(「わたしたちの歩み 2011年改訂版」)は、私たち千葉県歴教協の1954年からの、およそ50余年にわたる歴史と言っても過言ではありません。千葉県歴教協の会員であつても初めて見る会報や会誌および『100時間』『100話』など絶版の書籍を集録することができました。

私たちは、21世紀を迎えながら、歴史教育・社会科教育のために、地域や子どもたちに根ざした活動をさらに続けていこうと考えています。そのためにも、過去に、千葉県歴教協の会員たちが何を語り、どのような実践を積み重ねてきたかを知らなければならぬと考え、DVDを製作するに至りました。

全国のなかまたちとともに、私たちの活動をふり返り、財産となることを期待しています。

このDVDをご希望の方は事務局までご連絡ください。1枚千円です(郵送料含む)。(M)

味を問い直す授業実践であり、千葉県歴教協の「子どもを主役にした」授業実践の到達点を示す報告になると思われます。この浅尾さんの報告は、千葉大会閉会集会の地域実践報告にもなっています。

2日目の分科会には6分科会で32本の報告が行なわれます。例年30本以上の報告が行なわれており、そのうちの半数以上が全国大会レポートへ推薦されています。昨年の全国大会福岡大会においては、千葉県からは全国で最も多い、18本の報告が行なわれました。全国大会では24の分科会がありますが、千葉県からは各分科会2本のレポートを千葉大会に出そうということで取り組んでいます。千葉集会で議論を深め、夏の千葉大会でも是非報告していただきたいと考えています。

今回の分科会では、東日本大震災関連のレポートが2本(中学校・高木郁次さん、平和と民主主義・末永明さん)報告されます。「3・11」の体験をどのように授業化してゆくのか、これはこれから授業実践の共通課題ですが、その課題に果敢に取り組んだ2人の報告に注目したいと思います。

分科会のもう一つの特色は、若い報告者が報告者全体の3分の1を占めているということです。大学生・院生が7名、さらに採用後5年以内の若い教員が4名います。学生の報告は、模擬授業や授業実践研究、地域研究など多彩です。また、若い教員からは授業実践報告だけでなく、日頃の教育実践の悩みや苦しみ、そして喜びなども語られると思います。さらに、若い参加者に大いに議論してもらおうということで、小学校、中学校、日本、世界の4分科会では、分科会の最初の報告を「若い教師と学生のためのオープニング・レポート」と位置づけて報告してもらおう予定です。

ここ数年、若い参加者に集会の運営も手伝ってもらおうということで、研究集会ではボランティアスタッフを組織しています。千葉集会でも法政大・千葉大・早稲田大・専修大・筑波大・駒沢大・東京学芸大・一橋大・茨城大、合わせて20名(1月10日現在)の学生・院生がボランティアスタッフとして運営に携わっています。若い参加者には、これを機会に歴教協活動に興味・関心を持っていただき、活動への継続的な参加をお願いしたいと思います。

講演会、地域実践報告、ワークショップ、そして分科会と盛りだくさんの内容ですが、2日間楽しく、しっかり学んで、明日の実践への活力につなげていきましょう。

第4回実行委員会の議論から

柄澤 守(現地事務局長)

2012年、いよいよ全国大会の年になりました。年度末をひかえて異動・クラス替えなど、あわただしくなる方もいると思いますが、大会のことも頭の隅に入れておいていただき、ご協力をお願いします。かく言う私も、年度末は時間割編成で学校に缶詰めになる予定ですトホホ……。

さて、第4回全国大会現地実行委員会が、12月18日に行われました。前回に引き続き、主に「地域に学ぶ集い」と「現地見学」について検討しました。

地域に学ぶ集いは、県の企画が8つ、本部企画が3つという数でほぼ固まりつつありますが、まだ他に全国の会員にぜひ話を聞かせたいという企画がありましたら、事務局に集約してください。実施時間帯は例年とちがい分科会1日目の後ですから、早く飲みに行きたい人たちを引き止める魅力的な内容と構成(正味2時間)を考えていただきたいと思います。

現地見学については、前田さんからプロットが出されました。いくつかの支部から原案が提示されて話し合うなかで、おさえるべきポイントが見えてきました。①ちらしに載せるコース名を工夫する。申し込もうとする人に「魅力的だ」と思わせるネーミングが必要だということです。②荷物の格納場所を確保する。プレコースも含め、参加者は大荷物を持っています。大型バスならば大丈夫ですが、マイクロあるいは電車移動の場合、駅のコインロッカー頼みでは無責任になります。集合

・解散地点を別にする際は、ぜひ対策を講じておいてください。③暑さ対策を忘れずに。歴教協もご他聞にもれず高齢化が進んでいます。飲み物の配布や日の当たらない場所での休憩など、倒れる人が出ないようなコース設定をお願いします。1月の実行委員会ですべてのコースについて議論、質を高めていきたいと思えます。

さて、いま壁にぶち当たっているのが全体会講演です。澤地久枝さんをご高齢を理由にボツになったため、実行委員会で、①小出裕章さん、②安西育郎さんをあげて本部に依頼しました。8月時点で原発問題が収束しているはずもなく、金曜の夜に多くの人に関心をもって集まってもらえるのは原発・放射能をテーマにした講演だということです。ところが、第一候補の小出さんはスケジュールが一杯で、8月の講演予約は2月以降にならないと確定しません。大会の「顔」である講演者が決まらなると、参加のよびかけにも今ひとつ力が入りません。講師変更も含めて次回実行委員会で議論したいと思えます。

上記の3つが決まると、次は分科会レポートの組織です。支部での学習会は充実しているでしょうか。疎遠になりつつある会員にもぜひ声をかけてください。日常の支部活動こそ千葉県歴教協の基盤なのですから。また、支部のメンバーだけでなく、千葉の力を全国に示すために、地域の掘りおこしや市民の勉強会の成果などにもアンテナをのばしておいてください。前回も書きましたが、3月の全国委員会がレポートの最終締切ですから、早めにアポとりをお願いします。

この間少し気になるのは、後援依頼していて逆風を受けている感じがあることです。千葉市教委は「社会科の団体はクレームがつく可能性がある」、コンベンションビューローは「うちも県傘下の団体なので、県教委の後援を先にとつてほしい」と、他人に責任を転化する言い方で難色を示してきました。ずるい言い回しです。行政が、子どもたちと地域の将来を真剣に考えている団体の活動を応援できないようでは、千葉県の未来は明るくありません。震災の打撃も受けている地域もあり、今は町おこしのエネルギーが必要なはずで、全国から集まる先生たちに千葉の魅力を知ってもらいましょう!と迫ってさらに追究したいと思えます。

最後に独り言ですが……、ちらしづくりの得意な人いませんか?関プロ集会に向けて私がつくったピラが「やる気が感じられない!」とダメ出しされ、急ぎよ角谷信一さんにご尽力願ってできた物のでき栄えが……天と地のちがひ!大変ショックでした。しかし才能の無い者の努力はしよせん空しいものです。どなたか哀れな事務局長をお救いください。

□リレー書評⑥／石井建夫『石井建夫著作集 はてなの社会科一再び“希望と生气”を語る社会科を』国土社、2011

石井さんの社会科教育の源流を学ぶ

大野一夫(船橋支部)

実践を支えた社会科教育研究

石井さんの今回の著作は、授業実践と社会科教育論で成り立っている。実践を積み重ねながら、その実践を客体化する戦後社会科教育の研究、そして導き出された「はてな」の社会科を提起するという書になっている。この視点から石井さんの著作を紹介したいと思う。

私たちが学ぶべき点の一つに、実践をやりっぱなしにしない、他者の評価のみに委ねない、自らの実践を社会科教育研究の対象にするということがあげられる。具体的には、初期社会科がめざしたこと、「山びこ学校」から何を継承するかにこだわってきた経過を読み取ることができる。そして、大切なことは「今に生かせる理念を探ることだ」という。石井さんが実践で追求してきた「はてな」と共通している部分を受けとめたからこそ、実際に山形に出かけ佐藤藤三郎さんの話も聞きに

出かけている。

二つ目は、社会科の学力論と教育課程の取り組みである。歴史学習30テーマ(年間プラン)は、歴史学習の「かたち」を単元学習として示した。これは教科書に沿って知識を獲得させる社会科ではなく、初期社会科から学んだ問題解決的な学習を活かしたプランになっていると読んだ。そこには、石井さんの言う「知識を順序良く教えていても歴史認識が育つとは限らない」という学力論とつながる。また、私たちにマイプランを持つことを示唆している。それが、社会科教育は現場でつくるものだと主張する石井さんの原点でもある。

三つ目は、こうした実践と研究の背景である。この書に収録された論稿は、多くがすでに発表されたものである。書籍以外では、千葉県歴教協や歴教協の機関誌、『子どもと教育』、『子どものしあわせ』、『教育』(教科研機関誌)、『週刊金曜日』、『平和通信』、『ちば』、『しんぶん赤旗』、『人間と教育』(民主教育研究所機関誌)、『民主教育研究所年報』『社会科教育研究』(日本社会科教育学会機関誌)、『日本の科学者』(日本科学者会議機関誌)、シンポジウム、大会などに及んでいる。歴教協のほかに民間教育研究団体の大会や集会にも積極的に参加し、多くの実践に学びながら社会科教育を考えていたことがわかる。

そして、土台になっていたのは子どもと教室と職場であった。小学校9年間の実践が社会科授業づくりの出発点になっている。問題解決的学習の活かし方、子どもの疑問や「はてな」を追求する学習は、その時の営みが大きいと受けとめている。社会科の授業と学級づくり、学年づくりがつながっている。子どもの疑問を引き受ける石井さんの姿勢を、この書から学ぶことができる。

今、伝えておきたいこと

書評ということで6回目に書く依頼を受けたのは、6月17日だった。まさか、10月に亡くなるとは考えもしなかった。この書が発行された時、ご家族から、「自分のしてきた仕事だけは良く覚えているのです」と伺っていただけに残念である。この書には、書き下ろしの論稿が収録されている。「2011年1月脱稿」とある。書くことも話すこともできない病状のなかでまとめられたこの一文が最後のメッセージなのだと思う。

そこで、この機会に伝えておきたいことを、与えられた字数のなかで書いておきたいと思う。千葉県歴教協に初期の頃から関わっていた「なかま」に載せるなら、いいだろう。

石井さんは、2008年春頃から、声が出にくいという症状が出て原因がわからないままいくつもの病院で検査を受けていた。ちょうど、東洋大学で授業が同じ曜日だったこともあり、症状については心配もしていたのだが……。そして、東京大会終了後の2008年8月28日に医師から難病(ALS)であることを宣告された。9月3日、石井さんと会い、病状のこと(当時は、症状のみしか話されなかった)や副委員長退任など、今後のことなどで相談を含めて話し合った。以来、月に1回程度、病状のことを含めて近況報告の手紙やメールを受け取り、『歴史地理教育』を読んだ「ひとりごと」感想が同封されていたこともあった。

2009年12月16日に帝京平成大学で講演を行う連絡が届いたので、ご家族に電話をして伺うことにした。講演は、チーム石井で、医学生に対して語った。文章は石井さんがつくり、教壇には石井さんを囲むようにして家族が代わって読んだり資料を提示したりするというかたちで行った。『ベッドから生を考える—第三の誕生』というテーマで、告知から500日、第三の誕生、介護でお世話になっている方々、医療に携わる若き人々へ、という内容であった。「……声が出ません。歩くことも、書くこともできません」で始まり、病気が進行しているなかで行ってきた大学の授業も「授業は楽しみ」「その後の学生との対話を楽しみ」「ただ声が出にくいので、ビデオやパワーポイントなどを使い教えました」と語り、かつての中学校でのこと、歴博に通っていたことなども話されたのが印象に残っている。医療に携わる人たちに向けた、患者と向き合う看護・介護の仕事の素晴らしさを語り、教育の視点から呼びかけた。講演終了後に石井さんと話したが、透明の文字盤での会話であった。これが生前の石井さんにお目にかかった最後である。この講演を契機に、2010年からは病名も公表するようにしたと聞いている。3年間に及ぶ闘病生活は、ご家族を含め大変だったことを

察するとともに、私たちに残されたメッセージを次世代につなぐことに努めたいと思う。

なお、この春、石井さんと一緒に書き上げた『資料で学ぶ日本史120時間』が刊行の予定である。生前に届けられなかったことが心残りである。

魅惑の千葉支部韓国旅行

江崎広章(千葉支部)

「前に韓国に行ったときに、残念ながら、おいしいもの、結局なかったんですよえ。帰りの飛行機で隣に座っていたおねえちゃんたちも、同じこと言ってたんですよえ」と、「韓国の鬼」三橋さんに居酒屋で話したら、「そんなことはない。じゃ、韓国ツアーをやろう」ということで実現した、韓国うまいものツアー。

三橋さんから旅行前に送られてきた日程表には、「朝食…△△の○○料理、昼食…△△の○○料理、夕食…△△の○○料理、…」と、こりゃ完全に「食うために行くツアーだ」と思えたところがとってもうれしい。訪れる料理屋を紹介するホームページのアドレスもすべて教えてくださったので、それらをすべてコピーして、「この店では、これは絶対にはずせないぞ」と赤マルつけて気合を入れて出国しました。もちろん、酔っ払って迷ってしまっても大丈夫なように、場所も地図ですべて調べて出国しました。そのためか、私がみなさんを案内する場面もありました。

今回の料理で、個人的に最高だったのが、サムゲタン(土俗村)でした。「韓国料理の国宝」「韓国の芸術」と私は言いたいですね。焼き上げた鳥が丸ごと一羽入っていて、その鳥の中にもち米、ナツメ、栗、高麗人参、にんにく、銀杏、松の実などなど、実にたくさんの具材が入っています。それを煮込んだスープは鳥の脂がそれほどきつくなく浮いていて、鳥の旨み、具材の旨みがみごとに浑然一体化しており、それはまるで最高に調和した紹興酒を飲んでいるような感動がありました。あれだけの種類の具材を使い、それを見事に調和させたこのサムゲタンは、芸術、国宝と言わざるをえないですね。店のづくりも、石焼ビビンバ元祖の全州中央会館のように、とっても歴史と風情を感じ、好感が持てます。個人的には、トイレがシャワートイレだったのが、死ぬほど感動しました。もちろん、トイレ、写真で撮影しました。そして、死ぬほどトイレしました。

明洞に滞在した24日～はクリスマスにあたったために、ものすごい人でした。似たものを言えば、正月1月1日の浅草・浅草寺仲見世、または1月2日の大須観音(わかります?名古屋です)。しかし、ホント、不思議なことがありました。明洞を夜遅くまでふらふらしていると、なぜか私に店の人が日本語で話しかけるのです。目の前を歩いている人に韓国語で話しかけているのに、急に私に「お兄さん、安くしますよ」と「日本語」で話しかけてくるのです。どうして?どうして?極めつけは、ナンタという劇場に行ったとき、チケットを渡す場所で、前の客には韓国語で話しかけているのに、私がチケットを渡したら、「席は後ろから4列目の真ん中です」と「日本語」で、韓国人が「初めて会った客」日本人に話しかけるのです。何で～、何で～。まあ、そりゃ、同行した人はわかっているでしょうが、確かに韓国人には見えない格好していましたよ、日本でも異様でしょう、あの格好は。「頼むから、日本語で話しかけてくるのはやめてくれー」と心の中で叫びながら、明洞の街を数日さまよっていました。

私、豚足、好きなんです。家の冷凍室に、常に豚足入っています。もちろん、スーパーで売っているような、あの真っ白い豚足じゃないですよ。ネット注文の、おいし～い豚足ですよ。ですから、豚足には目がないんですよ。南大門にいつてふらふらしていたとき、何と豚足屋が4軒続いてあったんですね。しかし、今から3時間後には上等焼肉屋で食事することになっていたのです。どうしようか、入ろうか止めようかともものすごく悩みましたが、「ここで入らなかつたら、一生後悔する」と思い、店

に入りました。豚足1本だけ食べるつもりでした。店に入って、「とんそく、とんそく」と言うと、「ひとつ?」とこれまた「日本語」で言うてくるじゃないですか。「もう、頼むから日本語で話しかけるのはやめてくれ」と思いましたが、「イエス、イエス」と言ったら、「2500ウオン」と言うじゃないですか。「2500ウオン?豚足1本で?日本のスーパーなら、300円ぐらいだが、これじゃ1700円じゃない?暴力豚足バーに入ってしまったか?」と思いましたが、韓国のみなさんは正直です、出てきた豚足、なんじゃこりゃー、ブタの供養かー、こんなに食えるかー、人見て出せー、おれは相撲取りに見えるかーというくらい出てきました(イメージ…大皿にぶたが寝ている)。でも、もったいないので、ジンロ1本を飲みながら、2時間後の焼肉をイメージしながら、ほとんど食べてしまいました。日本語も指導しておきました。多分、二度と行かれませぬ。

東日本大震災を経験して

市立習志野高校3年・Mさん

私は今避難をして千葉県に住んでいますが、もとは福島県南相馬に住んでいました。3月11日、東日本を大きな地震と津波そして原発事故が襲いました。以前から地震が起こると言われてきましたが、あれほど大きな被害が出るなんて誰も思っていなかったはずで。

中学生の高校入試のため学校が休みでした。私はあの日、夕方から友人と会う予定で、ちょうど家を出て5分ほどのところにいました。周りにいたカラスや犬が急に鳴き出し、地響きとともに大きな縦揺れに襲われ、目の前で地割れや家の倒壊を見た私は恐くなってしまい、近くにいた見知らぬおばあちゃんとお互いに慰めあい、私の携帯電話で地震の情報を収集していました。家に戻り家族や友人に連絡しようとしても、通信網が混雑していてつながらず、ただテレビで情報を得ることしかできず、不安でいっぱいになり涙が落ちてしまいました。その後家族とやっと連絡がつき、いったん冷静さを取り戻したのですが、大変なできごととはこれだけではありませんでした。

福島原発の事故は日本全体を不安に巻き込みました。原発の状況の会見があちこちの場所で開かれ、言うこともそれぞれで、どの情報が正しいのか混迷が広がりました。私の家は原発から23キロメートルほどのところにあり、今もホットスポットになっていますが、このときは余計に不安がつるばかりでした。地元の人は、原発さえなければ幸せに暮らせた。前の生活を返してほしい。いくら補償金をもらったとしても、お金には代えられないものがあると言っています。

私は津波に遭っていませんが、津波の後の海へ向かいました。いつもなら海が見えないはずの場所から水平線が見えていたり、がれきがいたるところに流れついていて、津波の威力を知らされました。津波がきた翌日、私と父は海の近くに住んでいる親戚を探しに出かけました。助かっていることを祈り、最初に避難所に行きましたが見当たらず、病院に行ってやっと二人の親戚に会えました。しかしあと二人が見つからず、最終的に遺体安置所に向かいました。私たちが到着すると、泣き崩れてしまっている人や、肉親を探しまわったためにドロまみれになった人であふれていました。遺体は、津波が来た瞬間を停止させたように表情も格好もそれぞれで、あの恐ろしさを物語っているように見えました。やはり二人の親戚の姿はありました。一人は何かを願うように手を組み合わせていて、もう一人は歯を食いしばりとても苦しそうな表情。遺体安置所でのことは鮮明に覚えています。

食べ物、みんな考えることは一緒で、避難するためにたくさん買いだめしていました。そのため、コンビニやスーパーの陳列棚には何もありませんでした。仕入れの見込みが遅れたり、なかったりで買えない人もいました。

私の学校は20キロ圏内で立ち入り禁止になっていて、みんなばらばらになってしまいました。サテライト校に通う子や学校を辞めてしまった子、私を含め転校した子がいます。

震災から8カ月。今被災地は復興に向けて少しずつ進んでいます。改めて家族の大事さに気づいた人もいれば、自分を見つめ直すことができた人などともいます。言い方は悪いかもしれませんが、何かに気づくキッカケになったのかなと思いました。私にとってあの日のできごとは一生忘れることのできないものになりました。

*彼女は今年度4月に転校してきました。教科書・制服などは学校側で用意しました。福島では商業高校に在籍していたため、商業科に転入しましたが、本校の商業科は2クラスしかないため3年間クラス替えがありません。その「濃厚」な集団に3年生から入って適応できるのか、大変心配しました。初めのうちは表情も硬かったのですが、周囲の生徒たちの「天然のノリ」が彼女をなごませたのか、しだいに本来の明るさを取り戻し、比較的スムーズに輪の中に入っていけたようです。例年異様な盛り上がりを見せる体育祭では応援団の一員にも加わり、高校生活を少し楽しめたのではないかと思っています。

この作文を書いてもらおうか少し迷いましたが、彼女自身にとっても、記憶が薄れる前に、今千葉の高校にいる自分の地点をきちんと確認する必要があると考えました。短い文章のなかに、おそらく風化することのない鮮烈な風景が浮かんできます。

現在姉の家に同居していますが、卒業後は看護専門学校の際に入る予定です。人の命をあずかる大切な仕事を通じて、自分が経験したことをプラスに生かしてほしいと願っています。(柄澤 守)

高麗大学校で「福島の戦後史」の授業をして(2)

三橋広夫(千葉支部)

「マグニチュード9の地震と10メートルを超える津波が東北地方の太平洋岸を襲う」。そして、メルトダウン。現在の状況は誰もわかっていない。それほど事態は深刻なのだ。核燃料が溶けて圧力容器に落ち、さらに格納容器に落ちて格納容器の壁を溶かして外部に出ている可能性が高い。そうした状況に対して、政府の対策を推進している学者たちの主張を紹介した。

まずは、斑目春樹・原子力安全委員長の言である。「非常用ディーゼルが2台同時に壊れて、いろいろな問題が起こるためには、そのほかにもあれも起こる、これも起こると、仮定の上に何個も重ねて、初めて大事故に至るわけです。だからそういうときに、非常用ディーゼル2個の破断も考えましょう、こう考えましょうと言っていると、設計ができなくなっちゃうんですよ。つまり可能性がある、これも可能性がある、そういうものを全部組み合わせていったら、ものなんて絶対つくれません。だからどこかで割り切るんです」。簡単に言うと、安全などを考えていたら原発はできないということだ。

次に紹介したのはWHO緊急被曝医療協力研究センター長山下俊一教授の主張である。「放射線の影響は、実はニコニコ笑ってる人には来ません。クヨクヨしてる人に来ます。これは明確な動物実験でわかっています」。これには高麗大生も苦笑していた。が、問題は、山下教授が4月に官邸に助言を行う原子力災害専門家グループに招聘され、政府の対策に影響を与えたことにある。政府が4月19日、放射能許容量を年間1ミリシーベルトから年間20ミリシーベルトに変更したからである。さらに、「私は日本国民の一人として国の指針に従う義務があります。科学者としては、100ミリシーベルト以下では発がんリスクは証明できない。だから、不安を持って将来を悲観するよりも、今、安心して、安全だと思って活動しなさいとずっと言い続けました。年間20ミリシーベルトは日本の国が決めたことです。私たちは日本国民です」という発言にあるように、彼が国民の健康よりも国家の政策を重視していることがわかる。

しかし、現実には福島からおよそ10万人が避難しているのである。これは今も続いている。その福島の現実をさらに探ってみよう。

「福島で生きていくと考えている人からすると、子どもを外に出すなっていう人とか、運動会を止

めさせるような人というのは煙たいわけです。ある高校で校庭の使用に関して説明会があった。その時一人の親が『本当に大丈夫ですか』って質問をしたんです。すると別の親がその質問を遮って立ち上がって、『そんなに心配だったら、学校をやめるべきだ。ここにいるからには、学校の方針を受け入れて、そんな質問すべきではない』と言った。そしたら、拍手が起きたんですって。怖いですね。子どもを来させている限りは文句を言うなっていう空気があるんです。」

ここには、共同体の負の側面が現れている。国が20ミリシーベルトで大丈夫と言っているのだから、それに疑義を挟むのは「非国民」だという思想が底流に流れている。あるいは、不安感がそうさせているのかもしれない。しかし、そのことが「疎開するかと母親に聞かれて、『友だちから離れるのは嫌だし、友だちを置いて自分だけ逃げるのも嫌だ。私は将来結婚するとしても、子どもは産みません。そういう覚悟でここに残る』』とする女子高生を生んでいるのである。高校生にこう覚悟させる何か。戦争中の日本と変わらない姿がそこにある。



最後に、「これからの市民生活」について高麗大生に考えさせた。考える素材としてまず、東アジアに現在、原発が88基存在するという地図を掲げた。これは韓国のHPからとったものなので、翻訳する必要がなかった。

そして、原発開発の技術が未確立であることを強調した。「使用済み核燃料はどんどんたまっていく。日本の場合、青森県六ヶ所村にいま3000トンの使用済み核燃料を貯蔵している。さらに5000トン増やす計画である。ただし貯蔵しているだけで、処理しているわけではない。」

小出裕章・京都大学原子炉実験所助教の次のような主張をどう受けとめるか、これがこの授業のねらいである。

「被曝に安全量なんてない。いま1年間に1ミリシーベルトという値が被曝の上限だと言われていますが、これは、危険があるけれども、この日本という社会で生きるのであれば、このくらいは我慢を下さいよと言われているような量なのです。それと同じように、途方もない汚染のものは出荷を停止し、それよりもちょっと良ければ安全だというようなこともやろうとしています。私はまずそれが根本的に間違っていると思っています。食べ物はどんなに汚染が激しくても出荷停止にはいけない。それは福島で長い間農業をやってきた人たち、漁業をやってきた人たちの生活、生きて来た歴史を守っていくためにも彼らがつくるものを捨てるというようなことはやってはいけないからです。汚染の高いものから低いものまできちっと測定をして、子どもに対しては汚染が極力低いものを与えていく。そして汚染の高いものは原子力をここまで許してきてしまった日本の大人たちが責任をとって自分たちで食べるという提案です。50歳を越えれば身体の放射能に対する感受性が劇的に減るわけですので、特にその世代は日本の原子力をここまで許した責任からも、そういう人たちが積極的に引き受けるべきです。」

高麗大生の意見は次号で紹介する。(つづく)

メールで千葉県歴教協会報「なかま」を配信しています。ご希望の方は下記までお名前とその旨をお知らせください。
chibarekkyo@csc.jp
また、職場や地域のことなどもぜひご投稿ください。(M)